芸振

大分県芸術文化振興会議

No.75　63.12

もくじ

ずいそう……1
第24回 大分県芸術祭(グラビア)……2
第24回 大分県芸術祭各賞受賞者……3
特別企画 芸振、25周年を迎えて…4～5
さざ波……6
シリーズ会員通信⑤ わたしは、今加盟団体の活動……7
事務局だより……8

■発行人：挟間正年　■編集人：小代基雍

（題字 首藤春草）

チャーチル会 大分の歩み

大分県芸術文化振興会議
顧問　河　野　　彰

県芸術祭参加、チャーチル会大分創立35周年記念第58回作品展が10月20日～25日トキハ会館で開催された。会員挙げて日頃制作した成果を、大は 100号の大作から6号の小品まで約90点を一堂に集めて展示したが、なかなかバラエティーに富んだ作品が並んだ。しかも、予想以上に反響を呼び、総入場者数2,000名を越す盛況であった。芸振関係の方々も大勢おいでいただき恐縮かつ感激している。

チャーチル会は、戦後昭和25年、荒廃した焼野原の東京に産ぶ声をあげその東京を第一号として、各地に続々と姉妹会が誕生した。チャーチル会大分は15番目として昭和28年11月に創立された。「職業人が本業のかたわら趣味と教養のために絵を楽しむ」という主旨でもって絵の好きな連中が期せずして集まってできた。その当時からの活動を振り返ってみると、時に、チャリティ小品展を開き、その益金を公共のために寄付したり、また会員の作品を即社会福祉施設などに寄贈したりしている。最近では、大分市の福祉施設「やすらぎ」の完成に際して会員全員の作品を寄贈した。しかし、まあ概していえば会活動の本すじはといえば《純粋に絵を楽しむ》ことである。毎月室内習作と野外スケッチを欠かさず、それらの成果を春秋二回一般展示することにしている。また時には海外にも一緒に出掛ける。5年前には中国北京、三年前には上海、蘇州まで足を伸ばした。余談であるが、上海蘇州行では、ついでに二三の医療施設を訪問。そこに会員の作品を寄贈して、はからずも日中親善に一役買った。

その外、全国単位の活動では、毎年一回全国大会をどこかの都市で開くが、昨年は大分がその世話を担当して約400名に及ぶ各地姉妹会会員が大分に集まり、市内や臼杵石仏などを写生、喜んで貰った。このように一年に一回全国の何処かで大会を機に旧知が友情を暖めあい、一緒に絵を描く、これは素晴しい喜びだ。

かくて、私達はおこがましくも例えば郷土の先覚田能村竹田先生が、地元岡藩の文人との交友の中、詩を作り絵をかいたように、また、先生が諸国を遊歴してその地の文人墨客と交歓したように、単に大分の会員だけに止まらず、全国の姉妹会の友人と交流することにより教養を一層高めることに努めている。

ともあれ、私達はこれからも、至って地味な活動ながら足の地についた自分に納得のいく歩みを続けて行きたいと思っている。

筆者による油彩＝舟溜り（6号F）

開幕ポスター

豊の国 夢と創造の芸術祭
141行事終わる

秋恒例の県芸術祭は、去る10月１日、杵築市における開幕公演を皮切りに、２か月間、県下各地で多彩に繰り広げられた。24回目の今年は、当初、全市町村の参加が予定されていたが、特殊な事情の中で、中止をする町村が出た。しかし、今年初めて芸術祭のために設定したテーマ〝豊の国　夢と創造の芸術祭〟のもとに史上最多の 141 の文化の華が咲き、来年の25回目に向けて大きな盛り上がりを見せた。

中幕ポスター

閉幕ポスター

萬謡会など7団体、7個人に

第24回 大分県芸術祭賞等を贈呈

喜びの受賞者たち

県芸術祭賞等を決める第24回大分県芸術祭主催者会議と同運営協議会を、去る12月7日、県婦人会館で開催。これまでにない数多くの候補者の中から、今年の芸術祭賞等に個人7人と7団体が決まり、14日、晴れの贈呈式が県大分総合庁舎で行われた。受賞者とその功績概要は、次のとおり。

区分	受賞者(団体・個人)	功績概要
芸術祭賞	萬謡会	杵築市で行った開幕公演「うたは黒潮にのせて」の主演団体として、会員延500人にのぼる大勢の出演者と民謡では初めて構成民謡を採用するなど新しい企画のもとに県芸術祭のオープニング公演を成功に導いた功績は誠に大きい。
	大分県日本舞踊連盟	県下邦舞界の精鋭が総出演し、「楠公」や「静」など芸術性高い出しもので、日本伝統芸能の一つ日本舞踊の神髄をいかんなく発揮。舞踊絵巻を繰り広げ、芸術祭の中盤を盛り上げるのに貢献。
	大分県児童文化研究会	第25回大分県児童文化祭のタイトルのもと郷土に根ざした素材で三部構成で臨み、演劇、舞踊、音楽などバラエティーに富んだ演出でファミリーで楽しめる夢のあふれる舞台を展開。県芸術祭のフィナーレを飾った功績は大きい。
功労賞	首藤 三郎	初演作「沈んだ島の物語」をはじめ、これまで県民演劇の劇中詩を数多く担当。特に、今年は、共催行事「荷馬車のある風景」の原作者として、県民演劇制作協議会を一方で支えるなど芸術文化の振興に寄与。
	田川 奨	昭和45年、県日本画協会発足当初から会長を務めるかたわら、県日本画展を毎年県芸術祭に参加させるなど日本画の充実・発展に尽力。
	菅 淳一	昭和30年、人形劇団「木馬の会」を結成以来、同団を育成。一方、永い間佐伯市の文化振興に尽力。中でも、県芸術祭の参加行事である佐伯市文化祭には、人形劇を積極的に参加させ、廃れゆく子どもの遊びや民話を復活させるなど児童文化の充実に寄与。
	杵築・速見・東国東広域市町村実行委員会	芸術祭開幕行事――"うたは黒潮にのせて""六郷満山文化の里"の開催に当たり、地元実行委員会として、主演団体萬謡会とともに中心的な役割を果し、その成功に導いた功績は誠に大きい。
功労賞	アートヴィレッヂ・ヤマガフェスティバル実行委員会	二宮美術館を中心に、美術・音楽・演劇など多彩な行事を展開。一地域の文化祭としては、芸術性や企画性で異彩を放ち、県芸術祭に一石を投ずるとともにその振興に貢献。
	朝地町・朝地町教育委員会	あさじアマチュア美術展は、彫刻家・朝倉文夫の偉業を顕彰するため、今年初めて開催。広く県下に参加を呼びかけ大成功を収めた。同展の誕生は、美術愛好家にとっても、県芸術祭にとっても画期的なもので、地方文化の振興に寄与。
	野津町・野津町教育委員会・野津町文化連盟	吉四六の里文化芸術まつりは、多彩な発表公演を盛り込んだ文化行事で、文字通り町民挙げての文化祭となっている。村おこし運動と文化祭がよく調和し、地方文化祭のモデルとして高い評価を受け地方文化の発展に寄与。
奨励賞	山本 裕基	数少ないテノール歌手として、昭和57年から活動しており、勝れた歌唱力と演技力は抜群。コミカルなものを得意として、「炭焼姫」の小五郎役は高く評価され、今後の活躍が期待されている。
	赤星 千鳥	県民演劇入団9年。これまで脇役やスタッフとして、同団の公演を大きく支えてきた。今年の共催行事「荷馬車のある風景」で主役の七緒の姉＝水絵を見事に演じ、リアリティに富んだ演技力は、特筆される。
新人賞	花柳雅良志	芸事に寄せる情熱と礼節は、人一倍のものがあり、その人格からにじみ出た今回の「楠公」の正行役は見事なもので、中幕公演を盛り上げる立役者となった。また、九州でも数少ない男性舞踊家として貴重な存在であり、県日本舞踊界を担う若者として期待される。
特別感謝状	山本 泰正	大分交響楽団の理事長として、永い間、団の育成に努める一方、特別参加行事である第3回おおいた音楽芸術週間のフィナーレを担当し、大分交響楽団演奏会の成功に尽力した。

新たな〝展開〟のとき

宮瀬 香多士

「もう25年たったのか」というのが、私の実感である。というのも、草創期のことがいまでも幾つかのシーンとして、鮮明に浮かんでくるからだ。

進　恒夫さん（当時県社会教育課文化係長）が新聞社にみえて「芸術文化団体の集まりをつくり、県芸術祭をやりたい」と言った日のことや「サロン的な会にするか、会議体的な組織にするか」で論じ合った第２回会合のこと、そして米田貞一氏（当時県立大分図書館長）らと役員選考について話し合ったことなど……、その一つひとつの情景が、モノクロームの静止画面のように私の脳裏に焼き付けられている。

それが、すでに四半世紀……。私は、県芸術文化振興会議（芸振会議）の創設以来、その貴重な歴史とともに歩めたことを、実に幸だと思う。

ところで芸振会議が社会的な活動として最初に取り組んだのは、県立美術博物館の建設問題である。実際の運動は、その後結成された県立美術博物館建設期成会で進められたが、この発起は芸振会議でなされた。しかし、美術博物館という大事業だけに、幅広い運動をしなければならない― ということで、上田保氏（元大分市長）に会長になっていただくとともに、芸振会議以外の方々にも入ってもらって期成会をつくったわけだ。

だが、期成会のメンバーは芸振会議の会員が多く、上田会長を中心に基金集めのためのオークション、紫の羽根の街頭募金、企業への寄付依頼と、みんな懸命に活動した。

この期成会も、芸振会議という組織があったから具体化できたのであり、一人ひとりがいかに美術博物館の必要性を感じても、なかなか組織づくりまでは行かなかったのではないかと思う。

機関誌「芸振」が出来たのは昭和45年８月。米田貞一氏が会長になってからだ。以来、号を重ねて第75号になったが、会員の意識高揚、会員の連帯感を生むのには大いにプラスしたと思う。米田氏は会長就任に際し「平常活動に力を入れたい」ということで「芸振」「年鑑」の発行とともに、創設時からの懸案であった会員による研究会や座談会、講演なども進めたいと言われていたが、これは今後の活動に残されている。

25周年を迎えた芸振会議。さらに地方文化の向上、芸術文化活動の活発化に向けて、新たな展開をすべき時にきていると思う。

（芸振会議・理事）

手ごろのホール建設を望む

太田 悠一

芸振会議に期待する

会員の一人として、これからの芸振会議の活動に期待していることを述べて見たい。

小さな文化団体に便利な文化施設の建設促進である。文化施設といっても種々あるが、私の言っているのは300人程度の客席（舞台はたっぷりと広く）をもつホールと小規模の展示室、そしてリハーサル室なども併設された施設である。これを県内に多数建設する。この運動を促進して頂きたい。

「また、文化施設がほしいという話か、無い物ねだりだ、小児的施設論だな」という人もいるだろう。しかし早い話大分市内でさえ芸館とコンパルホールの2施設にすぎない。たしかに文化会館もあるのだが興業や大会としてならよいだろうが文化団体の性格・規模や発表会の内容・対象によっては利用しにくいのである。公民館も実際に利用してみるとまことに不便な点が多い。今日の文化活動の多様性と、小さな文化団体が数多くあることを思えば小規模の多目的文化施設がどうしても必要なのである。

演劇グループの稽古、地域文化祭、音楽発表会etc、これらの殆どが小学校の体育館で行われるか、あるいはホテルなどが利用されている。場所があまりにもなさすぎる。

政治家は県民文化の振興について立派な意見をもっている人が多いが文化団体の関係者が練習や発表のための会場探しに奔走している現状を果してどの程度知っているのだろうか。

長唄会あるいは舞踊会の地方（じかた）の仕事で近県各地の文化施設に行ってみると、規模は小さいがその内容には目をみはるものが多い。大分県の文化活動の質の向上は事実である、文化施設が少なすぎることも事実である。この需要と供給の状態は（いささかヒステリックな比較とは思うが）芸振会議が誕生したころとあまり変ってはいないように思われる。

県民文化発展の方向や条件整備のあり方についてはいろいろな論議もあろうが、それはそれとして小さな文化団体にも便利のよい文化施設を県内に沢山つくってほしい。

これは県民文化の振興に確実に役立つものと確信している。

（芸振会議会員
長唄松樹会会主三世松永忠三郎）

さざ波

この頃思ったこと

藤原　嘉久

先頃11月１日竹田市で恒例の滝　廉太郎を偲ぶ音楽祭が催された。この音楽祭は竹田地方の幼・小・中・養護学校がほとんど出演し、滝　廉太郎の遺徳を偲ぶもので40回目を迎えた。会場では名曲「荒城の月」をはじめ数々の演奏が繰り広げられ盛会であった。

今年は、この音楽祭が40周年ということで、その夜記念のレセプションが関係者多数を集め地元のホテルで開かれた。席上の回顧談のひとつを紹介すると、40年前の当時竹田地方の小・中学校でピアノは竹田小学校だけにあったとのこと。そのピアノで伴奏するのだが「子どもも先生もオルガンばかりで練習しているので合わせるのに大変、またピアノのペタルの使い方も知らなかった教師がほとんどであった」というエピソードが会場を沸かせた。いまから考えるとまったく今昔の感深しである。

ここで、生活の中の文化を考えるとき「文化は日常の生活を豊かにする」ことが目的であろう。滝音楽祭は関係者の地道な努力で40年の間この地の子どもたちや、地域の人々の生活を豊かにする作用をしながら、心の中に深く定着している。滝　廉太郎は25歳でその天才的生涯を閉じたが、音楽祭は早くも彼の生涯の２倍近くの時間を経過したことになる。

まさに「人生は短く、芸術は長し」である。

これも先頃、新しい県民文化のあり方について豊の国文化創造県民会議が１年間の議論を中間報告した。それには大きな柱として、①公的文化施設の整備、②人づくり、③豊の国大分の演出、という三項目があげられている。今回は、まだ委員から出された意見を列記したのみで、さらに一年をかけ論議を深め、来年秋の本報告で結論が出されるという。

そこで、豊の国文化創造県民会議に期待すると共に、県民文化のあり方について考えるとき、「ごく普通の人の、ごくあたり前の生活に根づいた文化のこころ」が大切なのではなかろうか。最近はすぐれた文化芸術を鑑賞するだけにとどまらず、積極的にその創造に参加し楽しもうとする人が増えている。また、国や県が文化施策の推進と共に一定の役割を果すべきなのはいうまでもないことである。

私たちは一人ひとりが家庭や職場、地域の中で創造的な意識を持ち、活動することが文化のすそ野をより広げ、質を高めることになると思う。

（芸振会議・理事）

新シリーズ⑤
会員通信

わたしは、今

「尺八、生々流転」

板井 南桜山

昭和45年、県庁を自発退職してから尺八の勉強も本格的になった。それまで昭和30年都山流に師事、邦楽の演奏活動に入ったがそれと時期をほぼ同じくして民謡、詩吟の伴奏にも携わり今日に至っている。その間、県芸術祭の開閉幕行事や民謡の各種発表会、詩吟の全国大会、邦楽演奏会、大分交響楽団、大分ウィステリアコール、大分市少年少女合唱団、県民演劇等々、数々の団体との出会いを経験しながら邦楽と洋楽の接点を求めて音の探究に努めている。この間特に印象に残った体験の一つをご紹介する。

昭和61年の県芸術祭閉幕行事、ウィステリアコール特別演奏会に柴田南雄作曲「追分節考」に尺八で協演したことがある。曲は小諸馬子唄の元唄、信濃追分を基調にして男性女性の合唱曲にまとめたもので、総勢50人位を相手に使われた楽器は尺八一本だけ、しかも芸術会館の客席を歩きながらマイクなしで演奏せよとのこと。当日の指揮者は東京混声合唱団の常任指揮者の田中信昭氏。ご意見をお聞きしたところ、私の信州小諸宿歩きを生かして旅人、馬子の気持になって吹いて行けばコーラス、客席にはその心がしっかりと伝わる。マイクを通した音ではコーラスとの調和は十分でなく、この曲本来の味をそこなうものであるとのご教示をいただいて舞台をつとめ、その後、福岡での九州大会、長野での全国大会とこの曲を演奏したが、深い愛着と共に貴重な経験は平均律の洋楽と純正律の尺八との接点を確かめる上にも大へん良い勉強になった。これからも一層精進し尺八の真音への道を求めていきたい。

加盟団体の活動

大分第九を歌う会

昨年、第11回大分第九の夕べ

大分第九を歌う会が発足して、今年で12年目を迎える。１年目は、オーケストラの都合がつかず、ピアノ２台と合唱で、四楽章のみ私が指揮をし、大分市と別府市の２会場で演奏会をもつという、苦難の幕開けであったが、２年目からは、九州交響楽団との提携が実り、当時の指揮者であったドイツ人の、フォルカー・レニッケ氏の棒で３年、また次の指揮者黒岩英臣氏の棒で７年、そして今年は新たに指揮者として小泉ひろし氏を迎え、この12月16日、大分文化会館で演奏会を開催した。本会員は「第九」を歌うために集った人達で、既に合唱で舞台に上った人達の数は 2,064名にも達する。また本会を参考に、延岡、佐伯にも第九を歌う会が発足し活動を続け、その輪が拡がっている。ベートーベンの音楽の集大成とも言われる、この交響曲第九番に挑戦し、いつまでも歌い続けて行きたいと思う。

（芸振会議・名誉会員／大分第九を歌う会会長　野崎　哲）

新会員増える

芸振会議は、組織拡充のため、昨年度から会員の加入促進を呼びかけている。そういう中で、去る12月14日開催した理事会で、新たに７個人、４団体の加入を承認した。

今回承認された会員は次のとおり。なお、会員番号は、永久番号であり、退会した場合は欠番となる。

○個　人

番号	氏　名	住　所	電話番号等
131	湯原　恭子		
132	内田　淳子		
133	林　　栄子		
134	本室　清美		
135	河野美都里		
136	高橋　安雄		
137	秦野　妙子		

○団　体

団体名	氏　名	事務局所在地	会員数	ジャンル
ピアノグループぷれりゅーど	辻本友子		100	音
九州貨幣史学会	橋詰武彦		256	財
コーロ・カミニート	渡辺洋子		30	音
花の会	三浦美穂		30	音

久間氏、海外研修を終え帰国

マンハッタンをバックに

昭和63年度文化基金事業＝海外派遣者の一人、演劇の久間紘一郎（小袋丹）氏は、ブロードウェイの本場ニューヨークへ研修に行き、多くの成果を土産に無事帰国。

期　間 ＝ 昭和63年９月15日～30日（15日間）

テーマ ― 現代演劇のシステムとその実際

なお、もう一人の派遣者である洋舞の佐藤朱音氏は、この12月25日、モスクワに向けて出発する。

中間報告書を提出（知事室にて）

豊の国文化創造県民会議 知事へ中間報告

21世紀における大分県の文化の具現化とプログラムづくりを行うため、昨年９月に発足した豊の国文化創造県民会議（座長＝挟間正年）は、これまで、全体会議６回と４回の起草委員会を開き、中間的なまとめを行い、去る11月17日、知事に提出した。

なお、本報告は、この中間報告をより具体的なものとしてふくらませていき、来秋、提出することになっている。

地域文化功労者
（文部大臣表彰）

内藤　凡柳

昭和５年、別府番傘川柳会を創立。以来、県番傘川柳会長として、永年川柳の普及に努めた。

大分合同新聞文化賞

仲町　謙吉

昭和41年、県美術協会事務局長、引き続き60年から会長となり、県美協の発展に寄与。一方、芸振会議の副会長や県造形教育研究会長として活躍。

大分合同新聞文化賞

首藤　三郎

昭和45年、県詩人協会結成とともに同事務局長57年から会長を務める一方創作活動を続け、短文学の振興に貢献。

大分合同新聞特別功労賞

伊坂　里子

昭和30年、花柳流名取。32年に民踊社中・筑紫流を創設し現在宗家。県民踊連盟会長、芸振理事として活躍。